

昔の行水は今の太陽熱温水器

夏の日の朝にタライに水を張って表に出しておく、夕方にはぬる湯に近い「ひなた水」になっています。このひなた水のタライに入って汗を流すのが「行水」で、昭和の中期まではどこでも見られる夏の風物詩でした。若い女性が行水している姿はなかなか魅力があったのでしょうか、浮世絵の画題にもなっていたし、いつの世も生垣の隙間から覗こうとする懲りない男たちがいました。今は誰もタライで行水などしませんから、行水という言葉は今や死語になったとあってよいでしょう。しかし、水を張ったタライは太陽熱温水器に名を変えて今も使われており、シャワーは現代版の行水とあってよいでしょう。

太陽熱温水器は太陽熱で水を温める設備ですが、タライより効率よく熱を集められる集熱版を使い、集めた熱を逃がさない貯湯タンクがついています。得られるお湯の温度は真夏なら60℃、冬でも30℃ぐらいにはなります。ですから夏はシャワーや風呂には熱すぎるほどですが、冬や曇天の日には加温が必要です。省エネルギー効果は、夏場では給湯用のガスや石油がほとんどいらなくなり、冬場でも半分ぐらいにはなるでしょう。太陽光発電に比べると地味な存在ですが、貴重な脇役とあってよいでしょう。